PICKUP

F/T13 フェスティバル/トーキョー 物語を旅する

F/T12『F/Tモブ』東京芸術劇場ロワー広場 ©Ryosuke Kikuchi

フェスティバルが変える日常。芸劇＋池袋で、アートを楽しみ、新世界に出会う。

「アッ」と思ったその瞬間から、新しい世界が目の前に開ける——。この秋、東京芸術劇場を中心に池袋全域に展開する舞台芸術の祭典フェスティバル/トーキョー13（F/T13）。それは、私たちの日常に風穴を空け、その感性と思考を掘り起こす刺激的なイベントだ。

会場を訪れた人はまず、芸劇のアトリウムに出現した奇怪な巨大構造物に目を奪われるだろう。2001年の横浜トリエンナーレに全長50メートルのバッタを出品し話題を呼んだ現代美術家、椿昇が、F/T13の象徴として製作したオブジェ。そのモチーフは、ノーベル賞作家、エルフリーデ・イェリネクが3.11後の現実に取り組んだ戯曲『光のない。』シリーズ（その最新作『光のない。（プロローグ?）』が2バージョンで上演予定）だ。『声のない。』と題されたこの作品を前に、あなたは誰の、どんな声に想いを思い起こすだろう。

昨年、芸劇と池袋西口公園で展開され、注目を集めた一般参加型の群衆パフォーマンス「F/Tモブ」もパワーアップして再登場（「F/Tモブ・スペシャル」）。今回は近藤良平（コンドルズ）、三浦康嗣（□□□）をはじめとする4人の人気振付家、アーティストが、参加者と共に池袋の街へ繰り出す。互いになんの関係もなさそうに見えた通行人たちが、いっせいに息を合わせて動き始め、軽やかに街の風景を描きかえる様子は見るだけでも愉快。でも、さらに思い切って身体を動かせば、未体験の感覚、快感に出会えそうだ。

もちろん、劇場内で鑑賞する舞台作品も充実。今回は「物語を旅する」をテーマに私たちが暮らす、都市「東京」を題材にした演劇や日本の古典戯曲の現代版、演劇の虚構と現実の関係を考察する先鋭的な作品がプログラムされている。新しい楽しみと思索へと私たちを案内するフェスティバル。その扉は誰の前にも開かれている。

構成・文：鈴木理映子

F/T13 フェスティバル/トーキョー トーキョー発、舞台芸術の祭典 フェスティバル/トーキョー13

物語を旅する

2013（平成25）年11月9日（土）～12月8日（日）

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会
東京都／豊島区／アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・
東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）／公益財団法人としま未来文化財団／
NPO法人アートネットワーク・ジャパン
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団
平成25年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

http://festival-tokyo.jp/

東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296（休館日を除く 10:00～19:00）

Pick Up! 今、私たちが共有できる物語とは？　物語をつくることの意味とは——？
さまざまな視点から「物語」を考えるF/T13のラインナップから、おすすめの2作品を紹介！

リミニ・プロトコル『100%トーキョー』

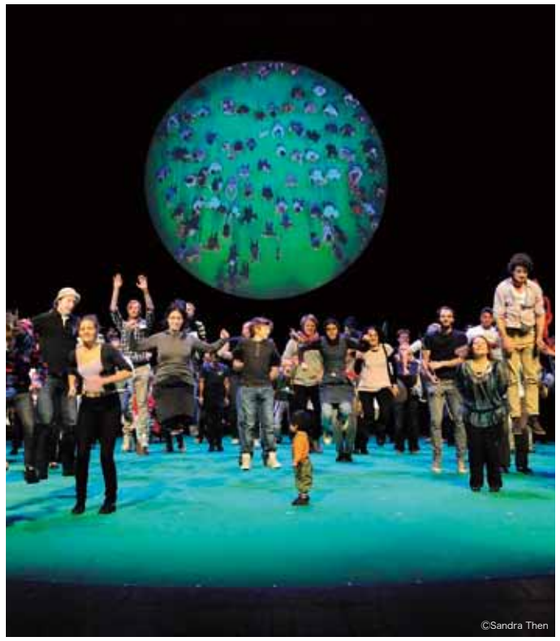
11月29日（金）～12月1日（日）プレイハウス

詳細はP14へ

100人の市民への生アンケートが描き出す、現代の「トーキョー物語」

荷物に見立てた観客をトラックで輸送し、物流業界の競争や規制、グローバル経済の功罪を体感させるツアーパフォーマンス『Cargo Tokyo-Yokohama』（F/T09秋）など、丁寧なリサーチと現実の事象を利用し、現代社会とそこに生きる人々の実像に迫るアート・プロジェクト・ユニット、リミニ・プロトコル。世界中の都市で数々のプロジェクトを展開する彼らが、4年ぶりに東京でのクリエーションを行う。

本作『100%トーキョー』は、東京都の人口統計（性別、居住地など）に基づいて集められた100人の市民が、舞台上でのYES/NOアンケートに答えるというもの。彼らはさまざまな質問に従って舞台上を移動し、時にマイクに向かい自らの半生を語り出す。いわば「動く意識調査」でもあるその眺めは、私たちが暮らす都市を改めて知るきっかけとなると同時に、いまだ出会わぬ多くの隣人の存在を思い起こさせるものともなりそうだ。



©Sandra Then

バック・トゥ・バック・シアター『ガネーシャ VS. 第三帝国』

12月6日（金）～12月8日（日）プレイハウス

詳細はP15へ

©Jeff Busby

インドの神様のスリリングな冒険。その波乱含みの上演の行方は——

ナチス（第三帝国）に奪われた幸せの印「卍」を取り返すために旅に出たインドの神・ガネーシャ。そのスリリングでファンタジックな物語は、それを演じる劇団内のいざこざによって、たびたび中断されてしまう。演劇の約束事にしたがい、無事に上演を運ぼうとする演出家と、それに抵抗を示す俳優たち。ユーモアあふれる彼らのやりとりは、時に笑いさえ誘いつつ、フィクションの「常識」を疑い、現実との関係を見直す機会を与えてもくれる。

バック・トゥ・バック・シアターは、実際に知的障がいを持つ俳優たちと共に設立された劇団。映像や照明を巧みに使ったイメージ豊かな空間づくりや、生命や美の基準をめぐる哲学的なテーマ設定でも知られている。中でもファンタジーの世界と現実とを同時に見通し、よりいっそう豊かな演劇空間へと昇華させた本作は、これまでに計7カ国上演された話題作。そのアジア初演をぜひ目撃しておこう。

©Jeff Busby